

地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021. 7



令和3年7月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第7号

No.758

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の郷愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生的なものだ。別ないいかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

二〇二二年 七月号 (通巻七八号)

◇今月の二十首詠……灯

奥田陽子 2

■作品A

白子れい・ばばりょうこ他 4

A 浜脇景子他 20

B 藤岡みゆき他 52

C 平山一子他 64

A 海保奈良繁他 78

■オリーブ集

金光昭子・河上悦子 42

◇今月の二人

中林昭三・阿藤たつる 16

香川進の生きものの歌 33

田土成彦 15

私と短歌との出会い(227)

大久保徳子 19

■中島央子歌集「紅葉坂きて」批評

三井 修 34

枯れることのない感性

桜井京子

未知の時空への憧れ

■久我田鶴子歌集「雀の帷子」批評

小塩卓哉 38

ゆったりとその言葉の奥へ

藤島秀憲

今は哀しい歌ばかりを

■歌壇月旦

高尾恭子 69

コロナ禍と歌人

◇シルクロード・カフェ

【責任編集】木村文子 48

■遊覧寄港 〈まとめられた人の数〉

菅田美代子 50

送風塔

樋口淳一郎 51

■五月号作品批評

A……………三浦好博・高津砂千子 70

千葉む津・茂木 斌

B……………山本 孟・若林美知恵

C……………谷川節子

オリーブ集……………近藤芳仙

今月の二人・作品評

久我田鶴子 18

最近の歌誌より

【編集部】 93

第26回実務委員会・報告

94

クリップ……………96 神田通信……………表3

(表紙デザイン) Tazuko Kyuga

あかり
灯

奥田 陽子

ひと日やまぬ雨の濡らせる街路あり雨を映して揺るる電飾
 灯をともし電車流れてゆく眼下高層の医院の窓辺に寄れり
 濁り川都会の川に降りたちし白き翼はね医院の窓に眼凝らす
 今日この日わが眼の前に舞い降りし白き翼のいかなる兆し
 いかならん兆しか来たる白き鳥われのみ見たりし漂う翼
 たましいの漂うごとく来たる鳥しばらくを舞い視界より消ゆ
 翳りきてさざ波立てる川の岸えのきむくのき椋木身を寄せて立つ
 暫くを去らずありたる鶴鴿の風立つ時を遠く翔びゆく

昭和二十年生まれ。
 昭和四十年「地中海」入社。
 羊グループ所属。
 歌集に「流離のつばさ」がある。

釣り糸の光れるのみの昼さがり草の乏しき水際みぎわをゆけり

研ぎすまし鏡となれる池の面遠景をゆくひとりを映す

日日の伸ぶる日脚にこころゆく花に明るむ椿の大樹

今はまだ冷たき風に吹かれて蕾わずかに見ゆるしだれ枝

寒気来ておぐらき葉影あかりに小さくも灯あかりとなれり今年あかりの椿

遅咲きの椿ようよう目覚めしかみひらくをわれの光となさん

転校を重ねたる子より紅きプレゼント呉れぬ春の巡りて

ちさき鴨は涼しき声に呼び交わし緩やかにゆくははの水脈追う

樹より川へつきつきに身を翻す対岸の鳥の水浴びの声

近づけば水音たてて隠れたりその音ながく耳にのこれる

水音の高き夕べを人來たりて流れ迫れる岸にたたずむ

その胸に還りてゆかん水の音流れに向きて人は黙せる

作品 A

白子 れい 鬼はなし 落

染井吉野・枝垂れ桜の一斉に今年は咲けり彼岸あけの日
干されいし疏水に水の流るるも待ち待つ驚の姿のあらす
白水仙・鈴蘭水仙咲きつぎて籠り居の重きこころほぐさる
松の芽のぐんぐん伸びたり剪定の約なすも未だ コロナの所為か
柔らかき春の陽さしに芝ざくら庭彩れり自肅の日々を
さくら花チラチラチラと散り初むに驚拙しケ・ケキョケキョと
われ思う「渡る世間に鬼はなし」ほんと本当楽しき日々よ

ばばりょうこ よもやよも 鹿

ああ きみを 哀しみいたり相寄りて桜愛でたるその夜の計報
よもやよも手を振り別れていくばくもなき夕べが終の日となろうとは
散りしきる桜はなびら遣されし女人の落涙とめどもなけれ
散るまきわの予感に狂めく桜花 人をも巻き込む幽界への力
桜には滅びの美学ありやなし酔い痴れたるや夢まぼろしの
六月という季めぐり来あとやさきくもる鳩の声ポッポ ポー
師のきみも邑子かあさんMというお人に加え母と奈々の忌

浜谷 久子 友 地

高校の入学式の出会いよりゆるやかな時二人で刻む
子育ても互いに見守る年月の先のあること疑いもせず
水族館さかなを見るともなく眺め友との終日京都遊びは
輸血となる手術血液製剤の薬害気付かぬまま何十年
体調に苦しみながら癌治療拒む心の変わることもなく
闘病の友への一首七日ごと「既読」に籠もる声を聴きいる
「楽しみにしているからね」に送信を続ける一首二年の途絶

浜本 芙美 姫皮 夢

筈の内側の皮姫皮とうなんとやさしきやまことばの
若者には人氣あるらしグループのぼっちゃん頭の七人ならぶ
夜桜の下にて語る男の子二人未来の夢は明るく確か
保育所の鯉のぼり五匹向かい家の軒のあわいを元気に泳ぐ
幾年をかけて咲きしかマキシリア五月の光くまなく吸いぬ
思いがけぬ所で足の指痛めし五体に不要なもの一つなし
出不精となりたる吾に節子さんがアジサイの花鉢届けくれたり

萩 葉子 海

・銀

憧れをもちて見た海小六のわたしの海が震災画像に
小六のバス旅の海と日和山クラスの誰彼思い出して
「あかねの空みるとふるさと恋しい」と震災十年仮設に住む人
アンティークコレクション展 天吊灯にけまん草咲く
人どおりなければ屈まり声かけるオオイヌノフグリの薄紫に
次世代の陶工展にてもとめたるぐい飲みの口づくり深緑がいい
摘んできた蔭のとうふたつが今やきゃらぶき作れるほどに

檜垣美保子

夕月

・昴

厚切りのトーストをスープに浸すは背中中は朝日があたためている
なにごともし日曜日午前九時宙つりのころに昼の献立
セロファンに包まれてレタスと一匹のナナホシテントウ二百円なり
拾いたるハンカチをひろげ新緑のもみじのしずえに 天のはごろも
くすのきはちいさきちさき花の盛りちりちりと光のあわだつ一樹
天頂に吊られたるごと立つおとこボードに昼の川を遡上す
右岸から左岸へわたる帰り道ビルのほさまの夕月に会う

福田庸子

みなみ風

・今

みなみ風山の社の幟旗野棕櫚の葉擦れうぐひすの声
ダム計画撤回求む歳月に人は老いたり集落も果つ
土砂運ぶクレーンの音しみる映人を去らしめ工事は進む
山里の乏しき水はなほ減るを導水路工事日々を貫く
限界集落老人のみのかたはらをダム工事進む水取りあげて
家あるも住み人なくて朽ちゆくをはげしく迫る芽吹きの色は
忘るまじアベノマスクの無駄遣ひ国の蓄へ年毎に減る

藤田美智子

動かぬ眼

・新

ペアになる級友のをらぬ少年の動かぬ眼がわれを見つむる
抱きたる小さき頭つらかすかにも鉛筆の芯ことき匂ひす
夢のなかひたすら謝罪を求めぬき覚めて相手の顔が消えたり
笹の葉のさやきに似たる音聞こゆ決めねばならぬひとつ抱へて
口にしてはならぬ言葉に傷つけし記憶が雲の切れ間を過る
雨雲の重たさが稜線を低くする君の不安をはかれぬままに
握りたるグーがパーより弱きこと知りてもついグーを出すなり

藤森巳行

大楠公

・銀

公園の楠に向かひ歌ひだす「青葉茂れる」俺つて変かな
幼き日心に留めしワンシーン母が歌ひし「桜井の訣別」
後継の弟子に育たむ誓ひの日大楠公の歌のありたり
大楠公の歌に託して子や孫に伝へむ思ひ正義に生きよ
今の世の大義は何か立正安世界の建設我らの使命
七十年前の山畑思ひ出す霜柱立つ秋の麦踏み
手拭で頬被りして麦を踏むさくさくと一畝終へたり

船田清子

卯の花

・天

桜・藤・花水木に続き卯の花も白くきらめく陽光を浴び
舗装されカラスノエンドウ生ふるなく春空へ吹く笛の音もなし
自販機の前にたむろし缶ビール飲む若者よ悲しき集ひ
そんなにも酒は魅力かうまいのか我には解せぬ頭痛と倦怠
卯月はや半ばを過ぎて木々の芽の溢る光にふつつ気負ふ
梔子くろくちよここ数年を潜めるし汝がかりもてコロナ清めよ
さやかなる風の流れにみづいろの空の真中まなかへ抱きとられゆく

牧 雄 彦

春寒の宵

・大

もそもそと庭土うこき黒き虫這ひ出できたり春浅き朝
 カワセミか翡翠の色が川の面をさつと飛び去り残影消えず
 かすかなる風に乗りくる楊琴のしらべが山のみどりを濃くす
 汝が小さき歩幅にあはせ歩みゆく道の落ち葉が足裏にやさし
 長き首水に洗はれ白鷺がこときれて春の川辺に横たふ
 ことごとと葉を刻む音となり家の窓に洩れ聞く春寒の宵
 しなければならぬこと頭に溢れる手をつけ得ずひと日暮れゆく

松 浦 禎 子

山姥ふたり

・羊

古き世の大和の国その都 誇りに生き来し辻弥生さん
 鏡神社の幡にぎりしめ鐘をつく弥生さんの写真送られてきぬ
 春日山ふもとの南都鏡神社その道隣りに弥生さん住む
 二人して樹の蔓つかみ登りたる遠き春の日春日の山に
 春日山の樹々をいろどる夕焼けにまだ意気高かり山姥ふたり
 大仏殿境内に眺めし「船弁慶」はるか知盛の霊しのびつつ
 身めぐりの人びとに愛され今を生く氏神さまの見守るこの地に

松 瀬 ト ヨ 子

あかり

・沖

鍋の湯に泳がす雑魚の浮き沈み朝の厨に海原があり
 幾日も人気なき窓辺あかあかとあかりが灯る寒緋桜咲く
 鴨は群れとぶ蝶をひとつまみ見あげる空に雲の早さよ
 朝の樹にじんじんじん活気あり蝶々は花に口つけをする
 若葉風樹々の香りをこき混せて吹きくる窓辺に「コロナに負けるな」
 それと無く謎めきてきこゆ三波四波と疫病の波を報ずるテレビ
 宵闇に心落として視るテレビそれぞれこの国の疫病の渦を

松 永 智 子

影

・嵐

あかときの闇に覚めきく闇の音ビル十階の音のなき音
 明けそむる空のいろなる闇を歩く人影ついで消えしままなる
 ひとり行く影ついで消え動くものなにもなくして衝あけゆく
 あかときの闇を歩く影あはくして人ひとりなり人ひとり行く
 音のなきあかとき闇を歩くひとり見てあるに影また闇にして
 明くるまの闇ふかくして行く影のついで消えたりのち何もなく
 かなしみてゐるにあらぬにこぼれる涙のあればそのままにして

三 浦 好 博

プラスチック

・銚

ああまたも車道の骸を避けてゆくラジオはミャンマー情勢を告ぐ
 春キャベツ畑の四倍我が家のキャベツラーメン ラーメンキャベツ
 巣籠もりの日々にコロナ死思ひつつ纏めてをりぬ私家版歌集
 陽の陰のドクダミを摘むお浸しの二食分にて春真つ盛り
 五百倍に薄めれば広い地球だぜ水に流してお仕舞ひ仕舞ひ
 好物の煮干しを食めど内臓のマイクプラスチックも入り来る
 食べるもの飲むもの息を吸ふだけでプラスチックが入り来るとふ

宮 本 靖 彦

知らぬ街

・凌

昨日植ゑし芋苗早も葉をあげて秋子ども等の笑顔のうかぶ
 コロナ避け知らざる街を歩き継ぐ花木咲く雨の土曜に
 三十年住みしに知らぬ街多しマスクに薫らず春の花
 昨年の秋手間かけ抜きし十葉の赤き新芽が庭飾り生ゆ
 芽をつなぐ深き土中の根の網はドクダミ国よ根だやし難し
 安楽に親しむ吾は棕櫚の葉の基から揺らぐを淋しみて視つ
 DX、クーポン、ポイント学ばざる吾に敵しき世代の差別

畑なかに聴くとしもなく聞いている朝のラジオのラヴィ・シャンカール
レーキにて土を均しているときのありやあらあラスバラを踏む
風呂場好き風呂場荒しの猫のこと一歳となるまる君のこと
つきつきと網戸をのぼる猫たちの腹を映して揺れる硝子戸
寒天は出しやばらぬという台詞とはいえ苦手あのところてん
「おちよやん」が嫌いな我と妻子との確執ありて夕餉時さやく
遮断機の音が聞こえる漆黒の闇とはなれぬ夜の彼方より

御代田澄江 黄砂 茨

辛夷咲く春くれなるの色悲し慕ひるし兄のいまさぬ郷里の
古郷ゆ移し植ゑたる胡蝶花の今庭に咲く白く盛りて
黄砂とぶ空を見上げぬモンゴルにては死者も出で家畜も飛ばさると
中村哲医師の講演友と聴きし土浦会場にて澤池久枝氏に間違はれけり
脚付きのランドリーバスケットを妹の誕生日に贈ると次男財布貰ひて
楚々として庭に咲きぬし胡蝶花の仏間に置けば只に寂しふ
灌仏会釈迦牟尼の誕生日四月八日花まつりせよとや百花咲き添ふ

茂木 斌 「亀満」 埴

去年の日の日記をめくりハルリンドウ咲く日ぞ森へハンドルを取る
自の文字の下に心の文字つけて心なければ息は叶はず
長寿とは亀の万年春宵を「亀萬」といふ酒をいただく
草を取る畑に続く草むらに雉子の珍し空に雲雀も
かりん並木も花散り尽くし里山の衰衰として緑濃ゆくす
爾の字の筆順さらふ春の朝不要不急の自爾のなほも
奈良大会中止となりて残念なり二上山への足は遠のく

肩の痛み膝へ腰へと広がりにて身動きできずうづくまる母
全身にひろがる痛みに堪えきれず殺してくれと訴える母
誰も居ぬ部屋にて転び倒れたる母は幾ばくの時を過ごしし
集中治療室に運ばれてゆく母を送る耳は聞こえて我に頷く
言葉にはならぬ声にて答えている母の呼吸器のマスクが曇る
迷惑をかけているねと聞こえたり回らぬ舌で最期の床で
命の火細りゆく母の耳もとに「母ちゃん」と呼ぶ我と妹

山下雅子 活力 習

ひさびさのゆるきのほりの辛くなるマスクのせいかな齢のせい
すたすたとわれを越しゆく人の背に漲る活力もはや戻らぬ
線路沿いの細き歩道にすれ違ふ杖もつ二人自ずと会釈す
家々の屋根を木々をシルエットに今日の日沈む明日を約して
分かち得ぬ傷みを互みに秘めながら声なく見入りき山の落日
いつの間に降りみ降らずみしつとりと庭の緑のよるこびを聴く
ラッシュ時といえどもまばらの客運ぶ上り下りの思わぬのどかさ

山野幸司 黄 。

花びらを散らした咲く黄モクレンあこがれを待ち手の平伸ばす
葉の陰にひそやか隠る黄モクレン子の大声に庭に揺れおり
命かけ今日飛び交う雀らの田んぼの草にすがりつきたり
わら束の上に坐りし子ガエルの大地の恵み口開けて待つ
わら束を空へ放りし一瞬にへびは隠るる大地が抱く
丸刈りの乙女等顔は黒々と女を隠し貨車に乗り込む
奉天の夜は冷え込み抱き合う乙女らの上屋は輝く

山本 孟

桜散る

・大

吉 永 惟 昭

妻の誕生日

・熊

桜散る四月半ばの独り居に卒論見つく色褪せたるを
 家路への流れにさからひゆつくりとたそがれの街の空気をまとふ
 歌一つ考へる間に降りぬべきバス停過ぎぬ春の日に中を
 新聞の旅の広告一面を老いの眼に山河広がる
 読み疲れそほ降る雨の窓の外音なき春の午後の独り身
 本降りさだの団地のひと日家ごもり四月つごもりつじ咲き満つ
 年輪の柄の木時計振り子振り妻の遺影を遠ざけてゆく

養学登志子

ひとの死は

・凌

朝 井 恭 子

歳 月

・森

弘子さんが逝ってしまった 楽しいこととほどあったか聞いてはいない
 ひとの死は歳ではないと言いたい来しもあなたが先にいなくなるとは
 逝くひとに礼も言えず顔もみず日毎につのる逼迫の世に
 吾の老いさきいつ帰るかと言いついしを早々逝けり会わずとゆけり
 仲の良いつれあい迎えに来たのだとみんなが言うよそれしかない
 はり裂ける泣き声のありまっすぐに糸の垂れたる風船空へ
 ひとひらの一重のさくらみつけた日まだやや寒の水辺のひかり

横 田 敏 子

ぼたん

・福

磯 田 ひ さ 子

友

・森

ほったりとぼたんは咲きぬ花びらの重なり合える花のゆたかかさ
 ぼうたんの二十二枚の花びらの絹の手ざわり呀えわたる紅
 黒揚羽ぼたん巡りを飛びゆけり立夏の庭は今花盛り
 ぼうたんのひらくを待ちて初花を長病む妹に今朝届けたり
 花びらにゆうへの雨を抱きつつぼたん揺れおり風通るたび
 咲き満ちて夕べ閉じゆくぼうたんの明日の会いを楽しみて待つ
 コロナ忘れ命あふるる季愛でん新緑纏う街が膨らむ

ピカ一ツノ ドンは覚えぬ 崖下にたたきつけられし十三の乙女
 爆心下二キロメートルよくぞよくぞ今日迎えたり八十九歳
 コロナなくばせめて集わん豚児たち 誕生ケーキ二人で頬ばる
 薬漬け 病歴あまた 入院通 恋思いも加えておこう
 デイケアのお風呂がゆいつ生き甲斐か青春過ごしは温泉の邑
 五年過ぐ車椅子での生活が認知症在り要介護四
 人生を変えにし被爆変らざる終活うつろこれが人生

久々に詣でし父母の墓清めつつがなく在る今を感謝す
 歳月においてけぼりの我ならん古きアルバム日毎繰りいて
 光なき昼月見上げ生きる術つたなきわれと沁みて思いぬ
 亡き夫と握手をなしぬてのひらは夢の中にも温くありしよ
 こもり居の暮れなんとして夕刊は雨の匂いを伴いて来ぬ
 「不用品買いとります」の電話くる 不用品ならここに居ります
 一つ捨て三つ溜め込む日々にして我が終活は「生前不可」なり

葉ざくらのさやぐ下道あゆみゆく一年ぶりにいや二年ぶり
 向き合ひて座ればおのづと顔を寄せわれら語りきコロナ禍の前
 きまじめに人を避けつつ過ごす日々なじられしさへいとほしくなる
 ありありと友の不在よ草のびし庭にねこぐるま転がりしまま
 沈む陽をひたに拝めば身ぬちより弱し弱しといふ声のする
 にびいろの杉の林に沈みたる余光に今日の心をすすぐ
 今生の別れにあらず友があす施設に入るといふだけのこと

市原やよひ

新芽

・萬

奥田陽子

無風

・羊

学校の桜きれいのひと言に急ぎ行きたり風に散る前
休日の学校静まり返りいて自転車置き場を桜が覆う
朝戸練れば庭に紅白の川の如桃の花びら風のいたずら
玄関につばめ来てたよさりげなく言いて高校生孫婦り来る
金色に輝く花と近づけば垣いっばいの新芽なりけり
花いっばいと紛う新芽の垣も見え新しき街整い行けり
コロナ禍の入院かなし留守居する姉に日課のように電話す

梅本武義

寿命

・羊

小野雅子

白

・羊

予定なく老いゆく朝を聞いている遠く山鳩近くうぐいす
十五年までの寿命とふと思ひ十五年前を顧みるとき
「ばあちゃん」は「帰るや聞くに「じいちゃんが居る」と答える高めの声で
陰口となりて話の盛り上がり休憩延びるグラントゴルフ
耕す手休めて話す隣人のきれぎれの声話題は分かる
補助を受け猪防ぐ困いてコロナ禍の日を菜園広げる
えんどうの花に商家のそら豆の花に農家の少女を思う

大浪美雪

息吹

・森

神田鈴子

春の香り

・大

河川敷に二本並ぶ糸柳あはき緑の霞を吐けり
地に低く咲きゑる黄のたんぽぽを強く握るに弾力のあり
幾種もの蛙鳴き交ふ菜畑に跳び来し一匹朽葉色なす
空おほふ白木蓮の花かげに獺犬三匹跳ね飛び吠えつく
牧羊犬呼ばむと吹かるる指笛の春浅き空に吸ひこまれゆく
くこの芽を摘みゆきしこともはるかなり海望む丘に今もありしや
巻きたるまま芽を出すこごみ深緑巻かれし春の息吹をいただく

よじれつつ樹を巻き登る藤の蔓梢にあまたの花房揺らす
やわらかに照りかがやける柿若葉柿の畑に人声たかし
矢車はひろき区画にひとりの青色いかなる人の咲かせし
無風なる葉群わずかに揺らしつつ高きを移る鳥の影みゆ
頭上より鳥の声降る木のベンチひと節歌う声に聞きいる
日射し来てかがやくみどり枝うつる鳥のすがたの黒ぐるとして
キーキーと呼ぶ声かとも近づくに尾長群れつつ梢をわたる

朝の陽が照らしはじめ日曜の人は眠りの中なるマンション
誰もぬ庭園に立ち仰ぐなり咲きひろこれる白花みづき
弾むやうに歩いて朝の道をゆく制服の白あらたな少女
まつしろの新玉葱をうす切りし背き陶器の皿にひろぐる
あさり、キャベツ、土鍋に湯気の上りきて仕上げに垂らすうす口醬油
幼き日遠足で行きし潮干狩 汐の香りと海ほほづきよ
来年は名簿に載らぬ名を想ひあをき表紙の手帳を閉ざす

コロナ禍に身動きならぬ人の世へエルとなるや さくら波打つ
満開の花のトンネルくぐりゆきいつしか桜の世界に迷ふ
掘りたての筍をご飯に炊き込めばみづみづとして春の香れる
筍をうすき輪切りに「若竹吸ひ」木の芽を添へてたのしむ夕餉
宮津湾に今朝釣りしとふ鯛の尾のそり返りゑて黒き目ひかる
それとなく労はられつつ近隣の人にも護られ生きゆくわれか
満ち足りし思ひに眠る春の夜の夢に手を振る人かげを見き

菊地栄子

ムスカリ

・湾

忘れてはならぬと歌う「花は咲く」声上擡りて涙あふれき
地震止みカセットコンロに鍋を掛くますます我は強くなるらし
焦点の定まらざりしは何故に日永くなりし道を行けども
ムスカリの根本に二つの雷見ゆ我は言うべきこと言わざりき
スポーツ店閉じられ書店の棚の奥アニメ・コミックスペース広ぐ
悲しげには見えぬピンクの露地の花丸まっている背中を叩く
連れ立てる家猫にわかに糞せしが惚げる枯葉掛けたる様も

北山雪男

残日抄

・伊

真つ黒のマスクもいつしか目に慣れてコロナ戦争二年目となる
アクリル板隔て言葉を交はしたり未決の面会室の如くに
慎ましく微睡む真昼、行く春の書架に腐食の記憶並べて
視る人の群に混じりて我は聴く樹々に小鳥に 蹟く星に
立ち直る術何処にある そそくさと夜の領域に紛れ込む風
戻り得ぬ昨日を肴に一人呑む、ノンアルコール麦酒ちびちび
ここいらでひとまづ締めとしませうか出口不明の今日の日ならば

木村文子

三個の石

・羊

左目に糸ひく涙があふれだす日本のどこかに梅雨が来るころ
口中にフルーツゼリーは崩れゆき鏡のなかには変わらぬまなこ
病院のまろき静謐いつもより厚い空気に圧されておりぬ
目蓋の裏に小石があるらしく〈取りましようか〉と問われておりぬ
まなぶたを開かれ虹が散らばりぬ ひとときわ輝くピンセットあり
重き水跳ねあげ光は潜りゆくさざなみひとつ心にたてて
薄い黄をまとった凧の海がある 三個の石をまなこは生みたり

草刈十郎

菓ごもり

・世

孫受験笑顔の帰宅信じ待つ音なくふくらむ花のつぼみの
若かりしころの想ひ出かみしむる叱咤の言葉いとありがたし
見なれたる椿の木なれど落椿これほどまでに咲きてゐしとは
テレビにてマスクの地蔵見し夜のしばし心のあたたかかりし
誰も来ず何処へも行けずうつつと菓ごもりの日々春惜しみをり
コロナ禍にいつまで続く菓ごもりか心をいやす庭の花ばな
一人よし一人は淋し一人酌むコロナ禍の夕やはり淋しき

國井節子

約束

・春

「山いっぱいだけ桜を植えてほしい」母との約束果たした男
どこを見ても杉や檜の山ばかり「桜が見たい」母のひと言
高見山しだけ桜の美しさ宇陀の秘伝の菓草料理
杉の木の色木肌に手を触れて思ひめぐらす 古の森
山道の切株の上に置かれたる椿の花は誰の目じるし
森の中一本気高し山桜亡き母と愛でしは遥かなりけり
森中をしまだ桜の園にして約束はたした男の笑顔

河野繁子

武蔵鏡

・雁

出不精は誘いごとわり草木をほうと眺めて日の過ぎてゆく
中腹より長くさがりて藤咲けりひねもすゆるる紫の滝
寒き日の樹の枝に止まり陽を浴びる黒き鴉にみどりの縁どり
菊戴、アトリも斜めの陽をうけて緑に見えしは此れだなど知る
すつと立つ芽よりそれぞれ形変えむさし鏡へ浦島草へ
どれもこれも葉を広げるに余念なくテンナンショウの語り始める
川掃除終えたる人の群れ去れば猩猩袴の跡かたのなし

小林能子

ワクチン接種

・羊

明治生れの長寿を祝ふ記事あれば市の広報にひとつ近づくと
 ワクチン接種予約のサイト広報にあれど接続ならず訝る
 片の目にバランス保ち踏み出す一歩か集団ワクチン接種
 ワクチンの接種も生きる証^{あかし}いま老いの不安をやさしく抱き
 マスク検温消毒手洗ひデイケアの厳しきルールに守らるる日々
 コロナから守ると消毒万全の「バイク」をひたすら漕ぐ15分
 八十歳以上が二十七万の横浜にリハビリ仲間と生きる

近藤栄昭

下地

・虹

太陽の届く海中平面か色は等しくウルトラマリーナ
 海青くうねり高まる白波の下地塗りゆくウルトラマリーナ
 キャンパスの下地に微か色を見ず海の群青みどり生まれる
 遙かなる水平線は球弧とか誘う球弧を耐えて水平
 砂浜に白く打ちくる波の奥赤く描きぬ夕陽の下地
 水平線近くに生まれ消えてゆく沖の波頭は白く輝き
 うねる線波頭の輝き波あいを幾重に描けるか波の内奥

近藤芳仙

城跡の桜

・信

咲き満ちて水面にうつる桜花冬の古木の今を華やぐ
 カワセミを遊ばせてゐし細き枝にソメイヨシノの花あふれたり
 絵馬ゆるる音静かなり御社の真昼間人の気配もなくて
 参拝へ手を近づけて鳴る鈴の味気なきかな感染予防は
 井戸深く山へつづくといはるるも底ひの暗く湿れるが見ゆ
 石垣の石に見出す矢穴跡 手仕事にして親しみやすき
 御社の真田・仙石・松平継がれて長き歴史が遺る

坂上直美

憂月

・天

この春は花咲き急ぐ人もまた短き命あわただしかり
 雨の日に独りし読めば胸に沁む万葉集古義二ノ巻挽歌
 祈るのみただ祈るのみミヤンマーもウイグル自治区も香港シリアも
 あああれも春だったのだ忘れてるチエルノブイリの原発の事故
 高く高く飛ぶを試み疲れしか九階の窓虫一つ居る
 婚の日々昏しとう歌ありけれどわれは光に照らされていし
 君在さば共に歌いて騒ぎなむ「六甲嵐」タイガース勝つ

坂出裕子

電話

・洛

夜半覚めて歌を思へり朝刊のバイクの音の遠さかりつつ
 歌のあるしあはせ思ふ老いの日のころ遊びのつたなけれども
 夜はいつ明けるのだらう薄闇のコロナの刻の果つるともなく
 外つ國の子よりの電話長くなり繁くなりたりコロナ禍のもと
 朗らかに傍にゐるがに楽しげに話して切れぬ夜の電話の
 閉ざされて生くるコロナの日々なれど緋寒桜の緋は空に燃ゆ
 川べりの朝の散歩に小さな花の鉢買ひもどり来し幸

佐久間 晟

ひとり言

・商

生きてゐる楽しさ思うこと多く今日はあの事この事もせねば
 今日もまた愚痴に等しきこと並べ短歌教室の講義に向向く
 心美しきこの人たちに囲まれて何故に死ねるか九十五歳
 「先生」と寄り来てわれを囲む人等の美しき心は人妻には惜しき
 気まぐれの野の花恨めし独り言も言わずに過ぐす日々にてあれば
 楽しまん事など思う事もなく今日を生きてるただそれだけのこと
 おーい佐久間。今日も聞こえるその声はまだ生きてゐる香川師の声

佐藤道子 別れ

・甲

手を握ることさへ叶はぬ別れとは近くも残るも悔い深からむ
文字盤に「あいしてる、みち」と指しくれし宙へ旅立つ前日なりし
子の手前はぐらかし手をさすりぬし永久の別れとなるを思はず
追悼の論文集の札状を書き終へ私のつとめは終る

コロナ禍を知らずに逝きしをせめてもの幸と思はむさみしけれども
せねばならぬ何一つなしと思ふ世にそれでも月日はただ流れゆく
おちよやんに会ふのが唯一のお楽しみ馴染みし光秀去りゆきしより

篠原まり子

桜 さくら

・羊

桜花三日見ぬ間の葉桜に出だし手紙と拝復の文

見る夢のBGMはうつつなれ時に途切るる深夜放送

ほんやりと覚める朝のキリマンジャロ香りと味覚の確かなること
ペランタに摘むサニレタス二三枚朝餉一皿バランス整う

飲み薬一粒増えてヒイフウミイ直ぐに邪魔する目敏き小鳥

医師が見る血圧手帳の山や谷折れ線グラフ日日の宿題

コロナ禍に咲いても桜人の群散っても桜癒されて 危機

柴田登志恵

朝

・天

朝ごとに山から尺取連れ帰る人好き街好き浜風好きの

朝の日がをぐらき山の糸一本きらめかす先に尺取はるる

銀色の糸を光らし浜風にふうはり吹かれてみたき尺取

草も木も記憶の奥に抱き締めし太古の言葉芽吹く一斉

高木から鶺鴒の群れの鳴く声に背押されつつ日常へ向かふ

貨物船ゆつくり進む朝の海ぐいぐい近づくと急坂下る

六甲の緑のバステル色色信号変はるを気付かず見つむ

鈴木結志

宇宙酵母

・福

酒酵母宇宙培養期待して蔵元衆ら旅立ちを待つ

オリジナル「ふくしまの酒酵母」なり宇宙培養の成功祈る

神話めく宇宙こうばいようの熟成いのる蔵元杜氏ら

まほろしの宇宙培養酵母にぞ新日本酒の仕込み杜氏にかかる

福島の夢酵母仕込み日本酒と「宇宙酒」名にぞ売らるるを待つ

宇宙培養酵母仕込みぞ新日本酒の味で評価をねらう蔵元

うたハンター 謙釈もなく笑いにぞ「宇宙酒」に酔い夢見たきもの

関根榮子

畑友達

・埼

この径か記憶に曲ればつるバラのあふれ咲きたる垣根の続く

落羽松の新緑美しき公園の温水プールも閉されしずもる

会う人の一人もなかりし一日の終りを夫は散歩に行けり

摘み飽きるほどの毎日この四月スナップエンドウ実りの速し

帰りに来てはや自然な手消毒ワクチン接種の案内来ており

畑にて休憩のわれらに寄りて来る猫おりてこれも畑友達

一人居のコーヒータムに浮かせたるマシヌマロゆつくり溶け始めた

関根和美

この春

・埼

清方の築地明石町の粋姿まねる無謀に和服をまとう

一、二、三自動シャッターしかけてはマスク取りあわてる集合写真

すっぴんに居ならぶわれら盛装に似合わぬ顔もて無理にほほえむ

自が歯に母は染しむこの春もふきやたけのこ山くらげまで

桜花舞う古城をゆつくり夫の押す車椅子にて母はめぐりぬ

受苦受難つつしみて身に及ぶまで祈り唱うる聖週間を

天に吹くパンパス黄梅こでまると司祭は活けゆく復活の朝

高尾 恭子

明日の約束

・大

リモコンの操作わからず夫を待つ低反発のソファのへこみ
 おじいさんのような夫の背とおさかるドナドナドナとオベ室へ今朝
 消毒を三度すませて託したり壁の向こうのあなたの着替え
 物音のたたぬ屋内にライン来ぬ一人と一人の朝がはじまる
 美しき言葉つらつら連ねたり語尾の尖り風にとぼして
 花冷えの風におされて消えゆきぬ昨日のわたくし明日の約束
 新キャベツさくさく刻む傷つけて傷つけられて幾たび四月

高津 砂千子

妹背の滝

・風

濃くあわく重なるみどり揺らしつつ奔り落つ滝息呑むばかり
 太陽の光のなかにしぶきあく妹背の滝をまぶしく見上ぐ
 杳き日に子らが遊びし滝つほにあふれし水の今もゆたけき
 水紋となりて寄せくる水ぎわに拾いし石のくろきしずもり
 なにびとも生きよ生きよと勢いにまかせて落つる滝とどまらず
 今日のはたしか夏日の予報さにあれど滝のほとりは冷えびえ卯月
 滝の水ながれながれてゆく先は知らずとも良し春の闌けつつ

滝 田 靖子

善意の刃

・新

手をつなぎ歩き行くふたり幸せはかかる速度に掴むものかも
 武装する暇のなくて易易と善意の刃に斬られてしまふ
 録り置きしドラマばかりを見て過ごすメーデーもすでに過去の産物
 両首に包まれて眠るこの夜を異国に未だ野ざらしの屍
 遺骨混じる土砂を埋め立てに使ふとふ記事読む苦きモカ飲みながら
 身を捨ててる祖国はあらねざりながら身を捨てさせる国に暮らせり
 愚かではあるが捨ててはしまへないこの国に今日も震度五の地震

竹 下 妙子

戦く

・霧

矢継ぎ早変異ウイルスまん延しワクチン打てど吾は戦く
 韓国とふ美しき名を持つ燃ゆる山その背後には寝観音菩薩あり
 錆びつきし亡夫の時計の竜頭まくかすかな音に歳月思ふ
 思ひ出の登りつめたるひとところ亡夫ありてながく夕茜せり
 いつせいに風吹く向きに飛び立ちぬ鴨らの羽の陽にかがやける
 しづかなる雨降り出でて止みし夜あぢさるの奮何思はしむ
 青空を遠景として垂るる藤 花白ければあくがれに似て

田 土 成彦

四百歩

・宙

寄り道の四百歩ほど産土に礼して帰る何願ふなく
 薄霧のなか深更も灯を点す電話ボックスに人影動く
 四頭身のをさながはづみ追ひかける八頭身の自分の影を
 をさなごがたとどど駆けゆく遊歩道楡の若葉は萌え立つばかり
 毒のあるユウカリの葉を食べられる事のみにコアラの保ち来し生
 象の巨体保つべく長き鼻がある神の奇想の象形として
 苛立つた様子に右往左往するオオヤマネコの四つ足太く

田 土 才 恵

堤

・宙

散歩する今日の日もあれコロナ禍を大空蒼く風そよる吹く
 連休に繰り出す場所を失いし人の弁当持ち来る堤
 淀川のワンドに釣り糸垂らし立つ人の多きに今日は驚く
 寝そべって簡易テントに寛げるこれもコロナの産物の景
 ジョギングに駆けゆく人もマスクしてあえぎつつ日中堤防の道
 この堤機銃掃射に逃げ惑いしひと在りしとう暗き過去持つ
 千人塚いま守られて春の日のまどかなひかりたたえて据わる

玉井綾子

ポイント

・羊

ポイントがたまっているからローンで買えと言われておにぎり選ぶ
 買い物で貯めしポイント失効の予告メールをスルー出来ない
 ポイントの失効期限のお知らせに焦って使えばたった二〇円
 ポイントなど気にせず通りの店先で衝動的に買い物したし
 ポイントのたまるカードを案内し断る客をあわれに思う
 購入の履歴にポイントは付与されて買い物客は妨がれている
 割引のシール貼られし商品を買わすには買わせたくなし

虎谷信子

思ひ出と

・伴

室町は 呉服の杜の若葉かげ 呼子笛吹き、鳴き合はせ競る
 鳥籠を 末社の庭に並み立てて、鳴き合はせあり。昼蘭けにつつ
 審査びと 聞きこらすなり。落としゆく碁石の数は さへつりの数
 控へつつ 気遣はれる目白たち しこ名も美し。吹雪・鳳声
 廊戸に替はれる ステンドグラスにも 梓梓輪映ゆ。よすがとどめて
 コロナ禍で 逝きたる人の数 知らざるが 日常茶飯と
 東京に来ないで、と小池知事。息子は帰らぬと云ふも ためらひ

中島央子

「駒止めの桜」

・森

源頼朝よりのちかが巻狩の駒つなぎしとふ桜の老木幹ふとく立つ
 いさぎよく散る世は過ぎて八百年駒止めの桜枝をひろげる
 山裾に富士まなかひの陣屋跡狩宿といふ小字こまじに残る
 長屋門の古りし扉は閉されて春の日のなかしばし佇む
 川に沿ふ道くねくねと下りきて土の付きたる筍もとむ
 戦時中木炭バスの後押しし峠を現在いまは知らぬ間に過ぐ
 いっしかに便り途絶えし友おもふ山裾に霧の流れてやまず

中島義雄

さくら散る

・岡

学生の身を預けるし神奈川の常泉寺の桜咲きか散るらむ
 春の水待てる一樹のごとく佇ちうた心老いし身は力なし
 限りなく桜散るなり限りなく生き来しごとく立ちて身に浴ぶ
 一本の桜に足りて過ごす午後黄泉の光のごとく明かりぬ
 低く鳴る誕生律寺の鐘のこゑ父の形見の木を越えてくる
 散り果つる日は今宵かも花の下に儂なひと世を誰と語らむ
 辻斬りを終へたるごとく切れ悪しき剃刀に刺りし頸撫でてゐる

永塚節子

海

・銀

半時の小さな旅を企てる各駅停車に乗りたくなりて
 停車するプラットホームのネット越しただぼうぼうと春の海原
 強風に海へ落ちたる列車ありき不粋なネット致し方なし
 特急の踊り子号が走りゆく天城峠はしゃくなげの頃
 月に一度書類をかかえ降りし駅くだる坂道海までの道
 在りし日の温泉街のおもかけは何処にもあらずマンションの建つ
 弧を画く相模の海のはてに三浦半島房総も見ゆ

仲西正子

梯梧

・沖

蘭の花とりどりに並むその奥にほほえみであり文字摺の花
 当然と背を伸ばし並む蘭展に文字摺の花らせんの一途
 ああこれは芽吹く草木に触れて来し風のふくらむうりずんの朝
 触れあうは大切なればコロナ禍に会えぬ人等と声にふれあう
 コロナ禍は公園に来て園児等の笑う声きく梯梧花燃ゆ
 戦争に踏まれし時は抗いて咲きし梯梧か藍深き空
 公園に散り敷く梯梧の花集め平和とかきぬ四月一日

久我 田 鶴 子

B線上のアリア

・羊

逃げるには及ばず受けてたちながらなるやうにしかならない身なれ
あいまいな線上ゆらゆら野の草のもてあそばれて右に左に
線上をゆく網渡り そのつもりなくてもそこに立たされてゐた
はづされし残念の側に置かるるを喚くやアリア聞こえぬほどに
ひしめける星に新屋くははりて引き直されるライン遠望
遠吠えと見らるるがオチ アリアにはなり得ぬ歌を低くつぶやく
群れたくはないなどなんの宣言ぞ するまでもなくなるやうになる

・中島央子歌集『紅葉坂きて』（第937篇）

九曜書林

・久我田鶴子歌集『雀の帷子』（第936篇）

砂子屋書房

3000円＋税

香川進の生きものの歌

33

田土 成彦

・ねもころに雀遊ばせ母はいる寒のひびきの四方にたつなか

『甲虫村落』より

もう五十年の前のことだが、全国大会の帰路に松野雅子さんのお誘いに乗って香川宅にお邪魔させてもらったことがある。先生はすでに出張であったが、その留守宅に一泊させてもらった。若気の至りというかずいぶん無遠慮なことだ。歌にあるご母堂には翌朝の朝食のお世話をいただいたと記憶している。いかにも良家の品格のよい家刀自の風格を備えておられた。

ここでは「母」と詠われているが、先生の実母は先生九歳のおりになくなられているので、事実には養母とか姑とかくべき処だけれど、そのような表記分けを先生は好まなかった。歌会の席などでも「はは」という表記で実母、養母の書き分けは少なくとも歌の上ではするべきでないと言導されていた。

雀は人家の近くに生息し、雑食性のため時には害鳥となり時には益鳥となる。雀の徹底的な駆除をおこなって昆虫の大発生をきたし大飢饉を招いた国もある。寒のひびきとあるので、この頃の雀は「ふくら雀」と呼ばれる丸まったかわいらしい姿をしているものが多い。どこかご母堂の温和な姿に重なるものがある。よく揮毫などでも書かれた歌で、たぶん先生のお気に入り的一首だったのだろう。（フクラスズメという蛾もいる）